

【科目名】吃音		【担当教員】前新 直志
【授業区分】専門分野 (発声発語・嚥下障害学)	【授業コード】 5-30-1170-0-1	(メールアドレス) maeara@iuhw.ac.jp
【開講時期】2年次 前期	【選択必修】必修	(オフィスアワー)
【単位数】1単位	【コマ数】8コマ	授業開講日、非常勤控室にて対応
<p>【注意事項】</p> <p>(受講者に関わる情報・履修条件)</p> <p>吃音をどういう観点からとらえるかによって事前学習の内容が異なる。本講義では、2つの観点から準備して(考えて)おくことを勧める</p> <p>I. 「吃音症」を言語聴覚士の国家試験対策の視点から捉える場合</p> <p>①発声発語器官の解剖・生理(顎・口腔・顔面の構造と神経・筋の働き)</p> <p>②発声発語器官の生理機構からの逸脱としての臨床特徴(概略程度)</p> <p>II. 「吃音症」を臨床的視点から捉える場合</p> <p>①障害とは何か?</p> <p>②吃音は障害か?</p> <p>③悩みとは何か?(自分の悩み、他者の悩み、違いは何か)</p> <p>(受講のルールに関わる情報・予備知識)</p> <p>履修条件に対応しておいてください。特にIIについて自分なりに考えておいて下さい。</p>		
<p>【講義概要】</p> <p>(目的)吃音臨床を行うのに必要な基礎的知識を整理し、吃音の現象、検査・評価、指導、治療についての知識を身につけることを目的とする。講義は、実際の臨床例を紹介しつつ、理解を深めるために、吃音症状やコミュニケーション場面の分析、治療技法の演習を挿入しつつ進める。</p> <p>(方法)吃音の定義を始め、症状の紹介、基礎知識、吃音の生理学的側面、病因論へと続けて学修する。その後、症状分析、検査・評価・治療、治療技法演習等を包括的に学ぶ。</p>		
<p>【一般教育目標(GIO)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 吃音を中心とした流暢性障害について種類、発生機序、評価、診断および治療法を学ぶ。 <p>【行動目標(SBO)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 吃音症状の分類を理解し、それに応じた評価、鑑別技術を学ぶ。また、各発達期に応じた治療技術を学ぶ。 		
<p>【教科書・リザーブドブック】</p> <p>講義資料を用意する</p>		
<p>【参考書】</p> <p>「特別支援教育における吃音・流暢性障害のある子どもの理解と支援」(学苑社)</p>		

平成 26～28 年度入学者用

【評価に関わる情報】								
(評価の基準・方法)								
<ul style="list-style-type: none"> 成績評価基準は本学学則規程の GPA 制度に従う。 成績評価：「達成度評価」（下記）を参照 								
【達成度評価】	試験	小テ スト	レポート	成 果 発表	実技	ポートフォ リオ	その他	合計
総合評価割合	70	10	10	0	0	0	10	100 点
評 価 指 標	取り込む力・知識							
	思考・推論・創造の力							
	コラボレーションとリーダーシップ							
	発表力							
	学修に取り組む姿勢							
【授業日程と内容】								
回数	講義内容	授業の運営 方法		学修課題(予習・復習)	時 間 (分)			
1	吃音の定義 機序別の分類と臨床特徴の概要	講義						
2	吃音の原因 (発現機序・古典的分類・近代的原因論)	講義						
3	発話の流暢性発達過程と吃音 正常非流暢性～吃音症への進展と予防	講義						
4	発達段階別に応じた臨床特徴 I (幼児期～学童初期・後期)	講義						
5	発達段階別に応じた臨床特徴 II (中・高・成人期、他疾患を併発した症例)	講義						
6	評価：吃音検査法 (言語発達、発話症状の鑑別、心理面)	講義 (一部演習)						
7	治療・指導・援助 言語病理学的主義、臨床心理学的主義	講義						
8	吃音を取りまく社会環境への対応 言語聴覚士の今後の課題と役割	講義						

※授業日・教室は随時学生ポータルサイトにて配信します。

※ここに示す学修課題の時間は、必要とする授業外の学修時間(授業時間の 3 倍)に含むべき時間を示します。